

---

# 僕の魔法な学園生活

sunset

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の魔法な学園生活

### 【Nコード】

N0094J

### 【作者名】

sunset

### 【あらすじ】

魔法使いと、魔族が共存するこの世界・・・  
僕は過去を背負って生きることに決めたんだ。

## ブログ？どちらかといえば設定？（前書き）

はじめまして

sunsetです。

週に一回のペースで更新していきたいです。

まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いします！！！！

## プロローグ？どちらかといえば設定？

### 世界観

この世の人は、三つに分けることができる。

「一般人」と、「魔術師」、「魔族」にだ。

魔術師や魔族と言っても、一般人の人と姿は変わらない。

魔術師は、空気中に浮いている「マナ」という物質を体内に取り込み、

それを所謂、『魔法』として使うことができる。

発動方法は、呪文。

魔族は、生まれつき、「魔力」が身体に備わっており、それを魔法に変えることができる。

発動方法は、言葉（正確には、想像力と言霊）

この二種族の違いは、

魔術師は、一般人や、魔族（限りなく少ないが…）でも才能と努力次第でなることができるが、

魔族は、生まれつきのものであるため、魔力のあるものは努力次第で強くなれるが、

一般人はなることができない。

また、一般人の親から魔族の子どもが生まれることはないが、

親の片方、もしくは両親が魔術師だった場合、まれに生まれることがある。

又、使える魔法の種類も、

魔術師は、火、土、風、水、光、闇と5種類に限られてくるが、

魔族は、自分の想像した事を言葉にあらわせれば、魔術師の使える5種類のみだけでなく、

様々な魔法や、練金を扱うことができる。

過去のある事件により

魔族、魔術師の子供は、魔法学校に行くことを義務づけられた。

魔族と魔法使いに、いがみ合い等はない。

**ブログ？どちらかといえば設定？（後書き）**

わかりにくくて、すいません  
次から、本文に入ります。

## 1、始まり（前書き）

すいません

投稿がおくれてしまいました

本当にすいません

## 1、始まり

1、始まり

力の無いものは切り捨てられる、こんな醜い世界なんて滅べばいいんだ：

「ねえ、由香ちゃん、もう帰ろうよ」

「ゆーちゃんの弱虫、ボクもう知らないよ」

「あっ、まってよ」

その女の子は、スタスタと行って見えなくなってしまった。

途方にくれていると、突然彼女の声が聞こえた

「きゃあ、来ないで来ないでよ」

僕は、慌てて彼女の声のした方に駆けていった。

追いついてみると、彼女は、黒い化け物のようなものに襲われそうになっていた。



僕は、彼女を守りたい、守らなければという気持ちにかられた

相手は、化け物だし、自分は、まだ力もない子供だ、敵わないことなんて百も承知だ。

でも、もし、今の僕が彼女を見捨てたりすれば、一生後悔するだろうし、彼女の親も悲しむだろう：

僕は、ふと、前に一度読んだ、魔法を思い出した

たしか、魔物を、自分と共に異次元に送ることができるものだった

父さんに、その魔法の話をしたら、

「それは、禁術だから決して唱えてはいけないよ」

と怒られた。

でも、今は、その魔法が、今の僕に、出来る彼女を救う唯一の方法だった。

もう時間もない

彼女は、化け物に追い詰められていた、

僕に向かって何か叫んでいる

たぶん、「にげて」とか、言ってるのだろう…

しかし、僕はそれを無視して、呪文を唱えた

「異形なるものを黄泉の世界へ誘わん 時空強制転送」

どうやら、成功したようだ…

彼女は、消えかかっている化け物を見て驚き、僕を見て、更に驚いていた

僕は、これで良かったんだと思い、また、彼女に、伝えなければいけないことがあった…

ありがとう、そして、さようならと…

それと言った瞬間、僕の視界は暗転した…

## **1、始まり（後書き）**

次の投稿は早くするようにがんばります

入学・・・(前書き)

投稿おくれですいません・・・

## 入学・・・

恨まれる相手がいないのならば、どうやって恨まれればいいのでしょうか…

ぼくは、五年前に大きな間違いを犯してしまった

彼は僕をかばって死んでしまった…

彼の両親に罵られて、恨まれればどんなに楽だったか…

しかし彼の両親は僕に対して冷たく当たるところか、優しい目をして怖かったでしょう、ごめんね　なんて言葉をかけてくれたくれたんだ。

僕は、そんな二人に申し訳なくて、でもどうすることもできなくて、苦々しい思いを募らせる日々。

でも、そんな僕に、一筋の光がさしたんだ……………

### 『私立ユーギニア学園』

母親が理事長をやっている、主に魔族や魔法使いに魔法学を教えている学校だ。

いつまでの過去を引きずっている僕を見るに見かねて勧めてくれた。もちろん、何もしないで言うわけにはいかず、一般の生徒と同じように入学試験を受けたし、

学園は筆記試験以外に実技テストもあった。

けれども、僕は、魔法の才能があったみたいで、なんとかこの学園を好成績で受かることができた。

そして、僕は、決めたんだ

この学校で彼を救う方法を探すことを…

「学年代表、日向 由香」

「はい」

---

目の前にそびえ立つ、立派な学校  
もともと、ここらへんを治めていた人から買い取ったらしい。

（久しぶりだな、ここに帰ってくるのは…）

「おい、その君」

警備のおっさんが声をかけてきた

「きみ、勝手に入らないでくれないか、誰になんのようなんだい？」  
「」

「ああ、すいません、理事長に会いたいのですが…」

「理事長と？アポはとってある？」

「はい、理事長とです。ですがAp「おい、どうした」

後ろから声を、かけられた。

かけられた方を見ると、二十歳くらいに見える女の人がかっちに向  
かって歩いてくる

「理事長、おはようございます」

「ああ、おはよう、そちらの子は？」

「ああ、久しぶりだな、いや、こっちになってからならはじめまし  
てか？」

俺が挨拶すると、理事長はハツとし、驚いた顔をして、俺に尋ねて  
きた

「もしかして、夜光 優か？」

「ああ、そうだが、一発でわかるとは、さすがは、友梨亜さんだ」

友梨亜さんとは、昔知り合ってそれ以来の仲だ。

「久しぶりだな、ほら、立ち話もなんだし、私の部屋に来ないか？  
つもる話もあるし、そしてなにより、聞きたいことがあるからな、  
特にその魔力とか…」

「はは、やっぱりですか、俺も話があるんですよ」

入学・・・（後書き）

- ・ 学校の行き帰りで書いてるのですがなかなか話が進まないですね・・・



## 過去 1 (前書き)

ようやく投稿出来ました

## 過去 1

過去は振り返らずに生きてきたつもりだった：しかし、俺は知らず知らずのうちに捕らわれていたらしい、俺を救えるのは君か、神か、俺自身：それを信じて俺は今日もすすみゆく

「で、説明してもらおうか」

友梨亜さんは、理事長室の応接用の椅子に俺を座らせ、自分は理事長席に座った

「気が早いな。まあいいが、どこから話そうか…」

「さて、とりあえず聞いておきたいことがある、今のお前は夜光優本人なのか？」

（やはり、そこか…）

聞かれるとわかっていながらも、やはり今の自分を人間であった『夜光 優』と断言するのはきつかった。

「どうした？ 答えにくいものなら無理に言わなくてもいいぞ」

まるで俺の心を読まれたかのようだった。

この人は昔から鋭かったし、嘘はすぐばれた。

いや、俺が分かりやすいだけか？

「いや、答えられなくはない、ただ：説明するのが難しいだけだ。こんな答えじゃ満足しないと思うが、今の俺は友梨亜さんの知って

いる夜光優ではないが、俺は確かに夜光優だ。」

「そうか…変なことを聞いたな」

友梨亜さんはホッと息をはいて、そういった

「いや、聞かれると分かっていたし、言わなくても俺の過去を話したらすぐに分かったことだ。さて、最初に聞いた魔力の事だが…それについては、過去の話をしたほうが分かりやすいと思うのだが、それでいいか？」

友梨亜さんはコクリと、頷き俺に話すように促した。

七年前、俺と由香は友梨亜さんときわたりのもりも知っての通り約束を破って時渡の森に入ってしまったんだ。

途中で俺は怖くなって由香に帰ろうといった、けれどもそんな俺なんかおいて俺は由香を追いかけた。

でも俺はこの時に由香を止めておくべきだったんだ…

由香の後をおっていると、突然大きな唸り声と、由香の声が聞こえた。

俺は急いで由香のもとへ駆けつけた

由香は、黒いオーラを纏った魔族に襲われて、今にも殺されそうになっていた。

俺は、何とかして由香を助けたいと思った

そのとき俺は思い出した

### 『時空強制転送』

昔、暴走した魔族を永遠にこの次元から消し去るために、使われた魔法だ

当たり前だが、半人前にも満たないどころか、魔法の使用経験もない子供には、普通使用できるようなものではない…

だが、俺は、それを思いの強さと体の構造を一部魔力変換することで、成功させた

時渡の森には平和友好条約の調停前にいく匹もの魔族が封印されていたらしいな

当時の俺は知る由もなかったし、知っていたとしても同じ行動をしただろう…

ただ、いえるのは、由香の何かに反応してその封印が解けたことだ」

ここまでが、俺が僕だった頃の話しだ…

## 過去 1 (後書き)

過去・・・話すの早かったかな？

過去はまだまだつづきます

誤字脱字の忠告、よろしくお願いします

## 過去 2 (前書き)

本当に遅くなってすいません

みなさんの感想や意見をお待ちしております。

でわでわ、どぞ

## 過去 2

今までいた世界とは違う世界、周りを疑え、信じるな。信じられるのは自分だけ：

「時空強制転送をした俺はなぜか、魔界に出てきた。

といっても、体の構成の一部を失った痛みでここが魔界だと気付いたのはしばらくしてからだったがな。

痛みに耐えていると不意に横から声が聞こえたんだ

「やっと起きたのね：とりあえずお礼を言うわ、ってゆっくり話しをできる状態ではないわね：」

俺は一瞬戸惑った、そりゃそうだ、さっきまで命の危機さえ感じさせていたやつが、まるで何もなかったかのように、しかもまるで友達にしゃべりかけるような態度で話しかけてきたのだから

「お、お：まえ：は：だ？」

途切れ途切れになりながらもそう尋ねた

「ああ、私はだれかって？」

私の名前は、雷月風華、もと神で、今は邪神よ。

あつ、でも風華って呼んでね

それよりも、なにかお返ししないかね：

そうだ、『我、汝と生きん 我の力は汝のものに、我の知は汝のものに、我の仁は汝のものに 今、我、汝の永久の助けにならん』：

…」

俺と風華の間にいきなり魔法陣が現れた

「おい、いったいなにをしたんだ？」

俺は、何故か痛みの引いた体を起こして風華のいた方を向いてみた  
しかし、彼女は何処にもいなかった  
怪訝に思っていると、不意に頭の中に風華の声が頭の仲に響いた『  
やった、成功よ成功』

「うわっ??何?誰?」

いきなりのことで驚いたが、落ち着いて考えてみるとさっきまで聞  
いていた声によく似ていることに気付いた

「もしかして、風華…?」

『ええ、そうよ、あなたの身体と私の身体を、ん、簡単に言えば  
…合体?させたのよ』

どうやら俺の体に入り込んだみたいだ…  
だが今はそんなことよりも

「じゃあ、僕の体はどうなったの?なんでいたくないの?あと…な  
んで、尻尾がはえてるのさ!」

そう、俺のちょうど尾てい骨のあたりに何故か狐の尻尾のようなも  
のが生えていたのだ

『まあ、落ち着きなさいって、いい?あなたの体は無理な魔法を使



っちゃったから、体の細胞が消し飛んじやってたの。だから、治療<sup>ヒール</sup>は勿論、回復系統の魔術でもってもあなたの体は直らなかったわ。でも、私は思い浮かんだの、正常に機能している私の体と、あなたの体を共存の状態、つまり合体させればいいんじゃないのかってね。代償ももちろんあったわよあなたの体に変化が起こるのと、私が神の立場から降ろされることぐらいだけどね。』

神の立場をあっさり捨てるなんてと、俺は思った。

『そんなに、気に病むことじゃないわ。もう600年近くも消息を絶っていた神になんかたいした権力なんかないわ。』

・・・へ？

『どうしたの？そんな間抜けな声出して』

「いやいや、僕、声なんかだしてないよ。てか、なんで僕の考えが読めるの？」

『そんなの、私とあなたが思考をシェアリングしているからに決まってるじゃないの』

「いやいやいやいやいや、何当たり前じゃないのみたいなこと言っちゃってるの？今初めて聞いたよ！？」

『まあ、知らなくて当然か・・・。なんにしても、わざわざ声にださなくても、何が言いたいかわかるわよ。』

「そうなの？」

『ええ』

(風華、聞こえる)

『ええ、聞こえるわよ、ところで、あなたの名前は?』

あ・・・そういえば、まだ、自己紹介してなかったっけ・・・

(僕の名前は、夜光 優っています。よろしくね)

『さっきも、言ったけど、私の名前は雷月風華よろしくね』

(うん、ところで、ここはどこなの?)

『ここは魔界よ』

・・・は?

## 過去 2 (後書き)

次の更新もおくれると思いますが、どうか見捨てずにいて下さい。

また、読んでいただいた皆さん本当にありがとうございます。

過去、そして…挨拶？（前書き）

こんにちは

sunsetです

今回も、また、きっと、駄文ですが、楽しんで読んでいただければとおもいます

過去、そして…挨拶？

人は変わらずにはいられない

でも、過去の自分を守ることはできる

だから僕は、俺として自分を守っていくことにしたんだ。

「俺は、風華と彼女の古くからの知り合いに魔法と体術、あと生きるためのすべを叩き込まれた…。地獄の日々だった。俺は何とかそれに耐えて、そして、こっちに帰ってきたんだ・・・」

「そうか、あの後そんなことがあったんだな・・・よく頑張ったな、優」

友梨亜さんは、慈愛に満ちた目で俺を見ていた

『しかし、彼女もよく信じてくれたわね・・・』

（確かにね、俺なら絶対に信じられないが、友梨亜さんは元々観察眼があるからな）

『なるほどねえ～、ところで私の紹介はしてくれないのかしら？』

あ、忘れてた・・・

『ねえ、忘れてたなんて事は、ないでしょうね？』

(ソナコトナイデスヨ)

さすが、風華、無駄に鋭い、無駄にだけでも・・・

『なんか、けなされてる気もするけど、まあいいわ、早く紹介してよ』

(ああ、分かったよ)

めんどくさいがしかた『無くない』らしい・・・

「友梨亜さん、さっき言ってた、風華を紹介するよ」

「あら？どうやって?？」

(あ、そっか、化身になれることを言ってなかったっけ…)

『ええ、言って無かったわよ』

いや、言えよ…

「すまん、言ってなかったみたいだな、風華は化身として、姿を現すことが出来るんだ」

「そんなことが出来るのか。でも、そんな魔法聞いたことないぞ」

「ええ、確かに魔法では無理ですね」

「なら、どうやって…」

友梨亜さんは首をかしげていた

「魔術ですよ。俺は、風華と体の共有をしていることで、元々使えた魔力と魔術も使えるんですよ」

（まあ、他にも使えるものもあるんだけどね）

『今すぐ言わなくてもいいことよ。そんな簡単に教えてもいいもんじゃないわ』

そう、俺は、友梨亜さんには、いや、他人には簡単に言えない、力がまだある…

「なにっ?? そんなことありえるのか?」

友梨亜さんは驚いた顔で俺を見ていた

『なに、優まで驚いているのよ。普通の人間や魔族じゃ、魔法か魔術のどちらかしか使えないものでしょう。普通はね』

（そうだったな。普通は使えないもんな）

そう、普通は…

俺はあの時から、人でも魔族でもない、存在になっちゃったのだから…

「…う…優…おい優。」

「あ、すまん。なんだ?」

「いや、ボーとしていたようだったから…。大丈夫ならいい。で、早く見せてくれないか？」

「あ、ああ。すまんかった。じゃあ」

（風華、出てきてくれ）

『分かったわ』

「はじめまして、雷神風華といいます。よろしく」

ミニチュアサイズの風華が出てきた

あ、友梨亜さんが驚いてる…

それもそうか、普通はあり得ないことだからな…

「はじめまして、友梨亜いう、優が世話になったみたいだな」

「なんか、お母さんみたいね」

風華はクスクス笑ってそういった

「まあ、友梨亜さんは俺の二人目の母さんみたいなものだからな」

俺がそう言った瞬間、友梨亜さんはハッとした顔をした

「そういえば、優、舞と義人の所には、もう帰ったのか？」

「あゝ、まだだ」



「おい、早く顔を見せてやれ、舞も義人つもきつと喜ぶから」

「分かっている。だがとりあえず友梨亜さんに頼みごとをして、それがひと段落してから、落ち着いて帰ろうと思ってな」

よりにもよって、一番痛いところを突かれたな

「頼みごと？ なんだそれは？」

「ああ、友梨亜さんの学校って今日始まったばかりだよな？」

「ああ、そうだな」

「でだ、俺を編入させてはくれないか？」

「なんでだ？ 優はもう魔法も魔術も習うこともないだろう？ うちは、魔法学校だ、優が学ぶことなどないと思うが…」

友梨亜さんは不思議そうにきいてきた。

「確かに、魔法や魔術については、人並みには使える。だが、それは実践で得たものであって、荒削りなんだ。だから、俺は、学園に入って、色々と学びたいんだ。」

「そう…ならいいわ。クラスは、由香と一緒にしてあげる。テストも…あなたなら大丈夫でしょう？」

「ああ、たぶんな…。」

「なら、大丈夫。ほら、早く、舞と義人の所へ行ってあげなさい」

「色々とすまない…。それありがとう」

まったくいつまでたっても友梨亜さんには世話になりっぱなしだな

「なら行こうか、風華。父さんと母さんのところへ…」

「ええ」

さあ、帰ろうか、俺の家へ、家族のもとへ…

過去、そして…挨拶? (後書き)

次回の投稿もまた遅くなると思いますが、寛大な心でお待ち下さい  
!!  
↑おい!!

カブトさん色々ほんとにありがとうございます

みなさんも、一度、カブトさんの『こことは違うどこかの日常』を  
読んでみてください!!

ホントに面白いですよ(笑)

こことは違うどこかの日常

<http://ncode.syosetu.com/n7256j/>

皆様の感想をおまちしてます

## 再会 1（前書き）

こんにちは、 sunsetです

駄文ですが、楽しんで頂けると幸いです

でわ、どうぞ

## 再会 1

家族・・・

それは、たとえ、離れていようと、どんなに長い時が、会うことを拒もうとも、決して切れないもの・・・

そして、たとえ離れてしまっても、再会したとき涙を流して喜んでくれるものだ

いつからだろう・・・俺の心の支えとなって、それが絶対のものになったのは・・・

もともとあったもの？それとも、離れたときに？いや、そんな事はどうでもいいのかもしれない・・・

大切なことは、それが俺の心にある続けることなんだろう

俺は、あの後、友梨亜さんに背中を押され、学園から俺の家へと帰っているのだが、7年の月日というものは大きいものだ、鮮明に覚えているわけではないが、俺の覚えている限り、昔はこんなに栄えてなかったと思う

（変わったなあ…この町も）

『なに、言ってるのよ、変わったのは、町だけじゃないでしょ？』

（ああ、そうだな、俺も、変わったんだろうなあ…）

『ええ、昔はあんなにか弱い男の子だったのにねえ』

（おい、か弱いは無いだろう？確かに、弱かったし、泣き虫だった

が・・・)

『ふふ、それをか弱いっていうのよ。でもほんとに、よくここまでになったわね』

(まったくだよ。誰かさん達のスパルタ教育の賜物だな)

ほんとにスパルタだった・・・

毎日、傷だらけ…いや、あれは、傷なんて生ぬるいものじゃなかったな…

それこそ、毎日、血反吐を吐くほどの訓練をさせられ、帰ったら料理、掃除、洗濯などを押し付けられ…

うん、よく生きてるな、俺…

『そりゃ、紀伊ちゃんが先生だもんね…』

(ありゃ、厳しすぎないか?)

風華の言っている紀伊ちゃんとは、本名、雪零 紀伊といって、魔界で俺をこき使…鍛えてくれた師匠だ九尾で、容姿端麗、頭いいが、残念なことに、性格がきつい、ほんとに残念だ…

『あれ…? そんな事言っているのかな? 今度紀伊ちゃんに言つとくわよ…』

(ちよ、風華、それだけはやめてよ)

『ん…、仕方ないわね…。今度、りんごパイね』

(りょ…かい。でもほんとに、風華はりんごパイ好きだよな…)

『何をいまさら言ってるのよ？それに、優の料理、ほんとに美味しいし』

（ありがとな）

流石に、7年間も料理をやっていると、うまくなるものだ

『ところで、優？』

（何だ、風華？）

『優の家ってどこなの？』

（もうすぐつくよ。んゝ、あと100Mぐらいかな）

『すごい記憶力よねほんとに…』

しかし、実際に家族と再会するとなると、なんかどんな顔をすればいいのか、わからないものだ…

『そんなの簡単じゃないの？ただいまって普通の顔して家に入ればいいのよ』

（そうは、言っても、7年間だぞ、しかも、死んだと思われいるんだ、何事も無く家に入っていく事は出来ないよ）

『そう、難しく考えることは無いと思うわよ』

（はは、善処するよ）

そうこう言っているうちに、家の前に来てしまった：

（そういえば、風華には、俺の家族のこと、ほとんど話してなかったよね？）

『ええ、そういえば、そうね…、でも現実逃避はよくないわよ』

（うるさい、俺の家は、俗に旧家と言われるような、ほんとに古い家だ。家族構成は、父さんと母さんと二つ上の姉さんの四人家族で、父さんと母さんの名前は、友梨亜さんが言っていた通り義人と舞、父さんは教授を、母さんは専業主婦をやっている。ああ、あと姉さんの名前は、雪寧という。彼女のことは、会ってから話すよ）

『ええ、わかったわ』

さて、いつまでも、こうしていても埒が明かない…  
心を決めて、家のチャイム押そうとすると、

「あの？家に何か御用でしょうか？」

「え？」

後ろから声をかけられた

振り返ってみると、さっきいた、ユーギニア学園の制服を着た、女の人が立ってた

身長は155前後といったところだろうか？顔はかわいいというよりも綺麗だと表現したほうがいいだろうか…

しかし、どこか見覚えがある…もしかすると、いや、絶対そうなん



だろう

「もしかして、雪姉か？」

「へ？え？も、もしかして…優…ちゃん？」

「ああ、そうだ、久しぶりだな？」

「ど、どうして？しんでしまったんじゃ？」

「すまんかったな…」

「ひつく…ぐす…うわああん…優ちゃんなんだよね？ほんとにほんとに優ちゃんなんだよね？これ、夢じゃないんだよね？」

雪姉は、俺の胸に飛び込んでくると同時に、大きな声で泣き始めた。

「ほんとにごめん。色々心配かけたな…」

さて、これからどうしたものか…

俺はそんなことを考えながら、雪姉を慰めていた。

## 再会 1（後書き）

変なところできつてすいません

次話もまた不定期になってしまうと思います  
本当にすいません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0094j/>

---

僕の魔法な学園生活

2010年10月10日03時16分発行